

病害虫発生予察特殊報 第1号

作物名：緑肥用エンバク（セイヨウチャヒキ）
学名：*Avena storigosa* Schereb.
病名：エンバク褐斑細菌病（仮称）
病原菌：*Pseudomonas syringae* pv. *alisalensis*

1 発生確認経過

数年前から、県下各地のアブラナ科野菜栽培地域において、黒斑細菌病の多発が問題となっている。ところが、現地の発生実態を調査している中で、おもにセンチュウの対抗作物として導入されている緑肥用エンバク（セイヨウチャヒキ）の葉に、多数の褐色斑を伴う病害が確認された。県野菜花き試験場にて病原菌の分離を試みたところ、単一の細菌が病斑部位から分離された。そこで、分離細菌の培養特性、細菌学的性質ならびに遺伝子解析を行ったところ、*Pseudomonas syringae* pv. *alisalensis* による緑肥用エンバクの新病害「褐斑細菌病（仮称）」であることが判明した。本病の発生は国内初確認である。

なお本病原菌は、アブラナ科野菜の黒斑細菌病菌と同じである。

2 病徴及び被害

本病は主に、展開している下葉で発生が多く、幅2mm×長さ5mm程度の褐色の壊死斑を形成する(図1)。本病は、梅雨期や秋雨期などの比較的降雨が多い時期に多発する。緑肥用として栽培されていることもあり、発病に気がつかず耕耘され、そのまま土壌へ混和されているケースが多い。

3 病原菌と発生生態

- (1) 本菌は緑肥用エンバクをはじめ、キャベツ、ブロッコリー、ハクサイなどのアブラナ科作物やトマトに病原性があり、被害残渣とともに土壌中で生存し、次作の伝染源となる。特に、降雨や灌水による土壌の跳ね上がり、または砂埃等が水滴とともに伝搬する。
- (2) 本菌は、緑肥用エンバク（セイヨウチャヒキ）の多くの品種に比較的強い病原性を示し、飼料用エンバク（オーツ麦）に対しては総じて病原性は弱い。その他のイネ科作物に対する病原性は、一部のライムギやオオムギに軽微な病斑を形成する程度である（接種試験）。
- (3) 発病の好適条件は比較的低温であるが、断続的な降雨による曇雨天では、盛夏期でも発病しやすいので、これらの作期においては充分注意する。

4 防除対策

- (1) 現在のところ、本病を対象とする登録農薬はない。
- (2) 本病の常発地では、病原性の認められない緑肥作物を選択する。具体的な草種及び品種については、病害虫防除所または野菜花き試験場に相談する。
- (3) 発病が認められた場合は、後作にアブラナ科作物を栽培しない。



図1 緑肥用エンバクに認められる褐色壊死斑



図2 グリーンボールの黒斑細菌病



図3 ハクサイの黒斑細菌病



図4 ブロッコリーの黒斑細菌病

写真提供：長野県野菜花き試験場

長野県病害虫防除所
所長：平井 尚之
担当：武井 正明
TEL：026-248-6471（直通）
FAX：026-248-6473
E-mail：bojo@pref.nagano.lg.jp